

## 原子力規制委員会記者会見録

- 日時：令和4年9月28日（水）15:30～
- 場所：原子力規制委員会庁舎 13階B・C・D会議室
- 対応：山中委員長

### <質疑応答>

○司会 それでは、定刻になりましたので、ただいまから9月28日の原子力規制委員会定例会見を始めます。

皆様からの質問をお受けします。いつものとおり、所属とお名前をおっしゃってから、質問のほうをお願いいたします。

質問のある方は手を挙げてください。

では、ハセガワさんお願いします。

○記者 NHKのハセガワといいます。お願いします。

今日の最後、委員会の最後で発言された、エネ庁の審議会を受けての、エネ庁側の説明を聞くというような方針というか指示を示したと思うんですけども、その意図といいますか、伺えますでしょうか。

○山中委員長 委員会の中でもお話をさせていただきましたけれども、エネ庁の審議会のほうで、寿命延長と廃炉に関するような話題が上がったというふうに私自身も資料を拝見して、理解しております。

原子力規制委員会の厳正な規制に対して影響を及ぼしそうな課題ですので、エネ庁の資料の中にも、規制委員会とコミュニケーションを図りたいとの趣旨が、記載がございましたので、ぜひともこれは具体的な方向性等について伺いたいというふうに思いましたので、委員会で提案をさせていただいて、委員の先生方の御意見もあろうかと思いましたが、議論をさせていただいて、エネ庁のほうに直接委員会のほうに来ていただいて、具体的な内容を御説明いただいた後に、規制に影響があると考えられるような課題が見つかりましたら、その点について、委員会で改めて議論を進めたいと思っています。

○記者 この提案に当たってエネ庁なり何なりから、何かそういった場を設けていただかないかみたいな、そういった提案みたいなものがあつたんでしょうか。それとも御自身の判断というような。

○山中委員長 私自身の判断です。そういう議論があつたということは、報道等で承知しておりますし、資料も直接自分で見ましたので。その資料を見て、私自身が説明に来ていただいた方がよかろうと思って委員会に提案させていただいた次第です。

○記者 これまで推進側の動きといいますか、運転延長なり新增設なり含めて、そういう提案があつた場合には、委員会として議論するというような、そういうようなスタンスであつたようにも認識していて、規制委員会側からそういう場を設けてもらうようにと

いようなのも少し異例のような気もするんですけどもその上でどういう考えがあったというのを伺えますでしょうか。

○山中委員長 エネ庁から意見を聞くというスタンスについては、前委員長と決して変わるものではございませんし、私自身が資料を見て、極めて重大な問題であろうというふうに判断をいたしましたので、委員会で今日議論をさせていただいて、そのような方向で進めるということで規制庁のほうに指示した次第です。

○記者 極めて重大な問題というふうなおっしゃったそのあたり、具体的にはどういったところを御自身としては考えてるのでしょうか。

○山中委員長 経年劣化については、規制委員会が直接審査をして、検査をして、許可をし、判断をしているところです。そこに影響が出るような課題はないかどうかを確かめたかったというところがございます。

○記者 ありがとうございます。その上で、議論を聞いた上での、どういうふうな形で進めていくとかというのは、イメージはありますでしょうか。

○山中委員長 あくまでも、エネ庁が出される提案というのは、政策的なものであるという判断はしているんですけども、確かにそうであるかどうかという点を確認したいというのと、我々の規制権限まで影響を及ぼさないかどうか。その点について確認をさせていただきたいというところです。

○記者 ありがとうございます。

別件なんですけれども、1F（福島第一原子力発電所）のですね、1号機でイソコン（IC（非常用復水器））と呼ばれる、その事故対応で結構大きな判断が分かれたところ、そのブタの鼻というか、そのモヤモヤとした煙が出ているというような報告があったかと思うんですが、その部分が、使用済燃料プールの取出しに向けた大型建屋の大型カバーの設置に干渉するというので、撤去するというような、そういう東電からの発表があったんですけどもそれについて事故検証とも結構重なってくるのかなというところもあるんですが、それについての受け止めを伺えますでしょうか。

○山中委員長 実は、イソコンは私は直接、1号機のものを見ました。確かに大きな構造物なので、廃炉作業では、恐らく取り出したいと思われるのは、ちょうどその水素爆発が起きた下部の階に当たりますので、廃炉作業と事故調査というのは、両立させながら進めないといけませんので。そのあたり、十分注意しながら事故調査も進めたいというふうに思っておりますし、かなり頻繁にイソコンの周辺には、事故調査が入っておると思いますので、具体的に何か課題というのが見つかったら、既に上がっていると思うんですけど、今のところイソコンについてどういうところを調べたいとかというのは、まだ具体的には上がっておりませんので、廃炉作業との両立を考えるべきではないかなというふうに思っています。それを阻害してはいけないというふうに思っています。

○司会 それでは、先ほど手を挙げていたヤマダさん。

○記者 新潟日報のヤマダと申します、お世話になります。

先ほど職員さんに向けて訓辞をされました、どのようなお気持ちでされたのでしょうかということ、あと更田前委員長とああして並んで最後に立ったと思いますけど、何か何か更田さんと何か最後にどんな言葉をかけられたとか、何かやり取りがあったら教えてください。

○山中委員長 更田委員長とは、何か直接長時間の引継ぎがあったわけでもありませんし。ただずっと頻繁に、短い時間の会話はものすごくたくさんしていました。なので、その会話の中でいろんなことを教えていただきましたし、いろんなことを学んできたつもりです。なので、御退任の直前になって何か引継ぎがあったということは特にございません。

この5年間、そういう意味で非常にいろいろ御指導いただきましたし、もう感謝しかないですね。

○記者 何かその5年間で、更田前委員長に言われたことですごく印象に残ってる言葉とかがあったら。

○山中委員長 ちゃぶ台返しを恐れるなっていう。それは極めて印象に残っています。

○記者 ありがとうございます。

○司会 ほかに御質問はございますでしょうか。

○記者 毎日新聞のツチヤです。

先ほどのエネ庁を呼んでというところで、もう一つ伺いたいんですが、その規制に影響するような課題がないかどうか調べたい、確かめたいということだったんですけど、例えばどのようなことが課題として考えられるでしょうか。

○山中委員長 まず、原子力発電所の経年劣化については、我々がきちっと審査・検査の中で見ているというのが現状ですし、そこには、科学的・技術的にきちっと判断できているという自負があるんですけど。

これからそのような規制委員会の姿勢が貫けるかどうかというところ、そこに影響が出ないかどうかというところを確認したかったというのが本音でございます。

○記者 具体的にどのような形で影響してくるかみたいなのというのは考えられるところはありますか。

○山中委員長 現時点で、お話を聞いてみないとちょっと想像はできないんですけども、それ次第で、規制委員会で議論をかなりしないといけないところが出てくるかもしれませんし、特段の議論、まあ政策的なお話ですので、技術的にコメントを申し上げても、特に我々の何か審査・検査に影響が出るとは思っていないんですけども、そこを改めて確認したいという、できるだけ早いうちに確認をしたいという、それ以上でも、それ以下でもございません。

○記者 ありがとうございます。

○司会 ほかに御質問ございますでしょうか。

キリュウさん、お願いします。

○記者 宮城県の新聞社で河北新報社のキリュウと申します。よろしくをお願いします。

委員長、訓辞の中で、田中さん、更田さん、お二人と違って経験の部分は劣ると思いますということをおっしゃっていたと思うんですけど、確かにお二人とも委員長、かなり個性が強いお二人が続いたというところで、プレッシャーという部分もあると思うんですけども、その中でも、御自身の強みという部分というのはどういうふうに感じていらっしゃるのでしょうか。

○山中委員長 目標とするリーダー像、恐らく田中初代委員長、更田委員長、非常に能力も高いお方ですし、経験も豊富で、当然キャラクターも違いますので、そこは目指せないところです。

あえてお話をさせていただくとすると、就任の挨拶のときにもお話をさせていただきましたし、今日の訓辞の中でも少し触れたんですけども、謙虚なリーダーシップが発揮できたというふうに思っています。いわゆるハンプルリーダーを目指せばというふうに思っています。時には強く、時には優しく、時には厳しい、職員の関係性を重視するような、そういうリーダーになればというふうに思っています。

○司会 ほかに御質問ございますでしょうか。

では、ヤマノさん、お願いします。

○記者 朝日新聞のヤマノと申します。

また先ほどのエネ庁の話に戻ってしまうんですが、いわゆる規制委の姿勢が貫けるかどうかというところというのは、例えば、いわゆる、現状で、原発の経年劣化については一概には判断できないというような、今、御見解を示されているかと思うのですが、それについて、いわゆる規制委のほうで何か技術的な見解を、何年ならオーケーならまとめろみたいな、そういうことが出てくるのではないかというような御想定をされているというような感じなのではないでしょうか。

○山中委員長 まず、経年劣化の判断というのは、個別の原子力発電所についてなされなければならないものであるというふうに考えておりますし、それは、その判断というのは、やはり科学的・技術的な根拠に基づいた判断でないとまずい。あくまでも、エネ庁が提案されるのは、政策的な条件であって、それについて、直接長いとか短いとかというようなコメントをするか、技術的なコメントをするかどうかというのは、お話を聞いてみないと分かりませんが、あくまでも我々の審査というのは、個別の原子力発電所について、科学的・技術的な根拠に基づいて審査・検査をして判断をするという、そこについて、何か変化を求められるような提案であれば、それはもう拒否せざるを得ない。

ただ、そのような提案を政策上されないとは思いますが、これは本当に伺ってみたいと分かりませんので、伺ってからいろいろ判断をしたいと思います。

○記者 いわゆる、お話を聞かれた後での議論というのは、あくまでも規制委全体、委員の皆様全体の御議論の中で考えていくというような感じなのでしょうか。

○山中委員長 もちろん、5人の委員がそれぞれ御意見をお持ちだと思いますし、これまで検査・審査に深く関わってきたのは私自身ではございますけれども、委員の先生方それぞれが見識をお持ちですので、委員全体で議論をして、どういう方向性で今後、経年劣化について審査をしていくのか、あるいは検査をしていくのかということについて、改めて確認をするか、あるいは、変化をしないといけないのか、それも提案を伺った後の議論かなと思っています。あくまでも委員全体的で議論はしたいと思っています。

○記者 分かりました。ありがとうございました。

○司会 それでは、ヒロエさん、お願いします。

○記者 共同通信のヒロエといいます。よろしくお願いします。

僕もエネ庁の人を呼ぶという話なんですけども、規制委員会が令和2年7月29日に運転期間をどうするかという話と、経年劣化については、もう既に見解を取りまとめていると思いますけど、先ほど審査・検査で変化を求められるようなことがあれば、その提案は拒否せざるを得ないというふうな発言を言われたかと思いますが、この見解自体は、もう今もずっと生きている状態で、経産省からどのような提案とか、要望があったとしても、これは、見解は変わらないということなのでしょうか。

○山中委員長 そのとおりで結構だと思います。見解は変わっておりません。変えるつもりもありませんし。

○記者 今回の議論の場というのは、山中委員長が設定しようという話ですけど、これは、あちら側がそういうことを求めるのが先なんじゃないかなと思って、こっちがわざわざ先回りして場を持つ必要って、なぜ必要なのかなというのがちょっとよく分からなくて。

○山中委員長 エネ庁のいわゆる小委員会で、そういう議論がなされたということは、先週知りまして、資料も直接拝見して、課題としてはやはりできるだけ早く議論する必要があると議論したほうが良いと、私の判断で、こちらからお声をかけたというところです。

○記者 もう既に見解を出していて、変わらない状態で、何か来ても、何か結構バッティングするというか、結局議論を聞いた後にどういうことになるのかなというのがちょっとイメージできないのですが、どうなるのでしょうか。

○山中委員長 どのような、いわゆる政策提案がされるかというのは、御意見を拝聴して、それからかなと思いますので、特段大きな政策的な変化がなければ、我々もそのまま今までどおり審査・検査を続けていくという、そういう姿勢で変わらないと思いますし、

個別の発電所について審査をしていくという、その姿勢については変わらないと思います。

○記者 ありがとうございます。

○司会 ほかに御質問ございますか。

オノザワさん、お願いします。

○記者 東京新聞のオノザワと申します。よろしく申し上げます。

私もエネ庁の話なのですが、常々規制委員会は、福島事故の反省は、規制の虜になったことだったというような見解を示されてきて、これまでも推進サイドとの距離というのは保ってきたとは思いますが、こうやって規制委のほうから推進側の意見を聞きに行くというのは、また規制の虜になる構図、逆戻りするのじゃないかというふうにも、ちょっと心配になるのですが、そこは委員長どう思われますか。

○山中委員長 これも就任の御挨拶のときにお話を申し上げたことなんですけども、対話をする自身は、むしろ私自身は積極的にいろんな関係者と対話をすべきである、意見交換をすべきである。ただ、おっしゃるとおり、規制の虜には決してなってはいけない。そこは、東京電力福島第一原子力発電所の事故の教訓の一つとして堅持はしていくつもりです。

○記者 政府としては、電力需給の逼迫という背景もあって、かなり急いで原発、積極活用していこうというふうにも見えるのですが、そういう中でこうやって対話することで、おっしゃいましたが、規制の虜にはならないようにということですが、どういふところを注意しながら対話というか、議論をしていく必要があると、今の時点では思っていますか。

○山中委員長 これも繰り返しになりますけども、これまで10年間、守り続けてきた独立性と透明性、ここはぜひ堅持をしないといけないところだと思いますし、その二つをきちっと守ってさえいれば、対話をして、様々な意見を聞いても、特段悪影響があるとは思いませんし、むしろ規制のよき改善につなげていければというふうに思っています。

○記者 ちょっとしつこいようで。その対話を積極的にすることと、独立性を保つということは、相反しているのじゃないかなというふうにも考えちゃうのですが、そこについては委員長はどう思われますか。

○山中委員長 地元との対話に対して御質問があったときに、御要望にお応えをするという、そういう対話ではございません。意見交換をさせていただく、あるいは、疑問があったらお答えをする、あるいは、こちらから疑問を投げかける、そのようないわゆる対話を進めたいという意味でございます。相手の御要望を伺うような対話ではないということです。

○司会 ほかに御質問ございますでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、本日の会見は以上としたいと思います。ありがとうございました。

—了—